

令和元年6月19日現在

機関番号：35309

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11541

研究課題名(和文) 文化的背景に基づいたケアリング能力を測定する尺度開発と看護学生の能力への影響要因

研究課題名(英文) Development of the caring ability scale based on cultural background and factors effecting on nursing students

研究代表者

小野 聡子 (Ono, Satoko)

川崎医療福祉大学・医療福祉学部・講師

研究者番号：20610702

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：ケアリングとは、看護師-患者関係という看護を表す概念に内在しており、看護師の行動や態度を具現化した概念だった。我が国の看護基礎教育で使用されるテキストの中では、特に基本的人権の尊重に基づいていた。また、入院経験のある患者へのインタビューの結果、患者は、看護師のちょっとした声かけによって自分のことを「気にかけてくれる」と感じ、「親近感を生む会話」や「柔らかい態度」で声をかけやすいと感じていた。時には患者自身の状態を「察してくれる」ことや、「距離感を図る」看護師の態度に安心していた。看護師のケアリングには、安心できる療養環境を提供するための行動と心身の状態を察する行動が欠かせないことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ケアリングは看護の重要概念であるが、看護師-患者という関係の中に存在しているため、患者の文化的背景の違いによって看護師に求められるケアリング能力は異なると考えられる。我が国の文化的背景をもつ患者がケアリングをどのように捉えているのかを明らかにすることで、その人たちを対象にケアを提供する看護師に求められるケアリング能力を検討することが可能となった。それは、ケアリングという見えにくい概念を測定する尺度開発のための一助となる。

研究成果の概要(英文)：Caring is inherent in relationship between nurses and patients, and it is the concept embodied in the behavior and talking by nurses. In the textbooks used in the undergraduate nursing education, the concept of caring is based on the fundamental human right. The results of interviews with patients who were hospitalized showed that the patients felt cared for them by small talk from nurses and not to hesitate to ask nurses by friendly conversation and an affable manner. Patients were sometimes relieved nurses' behavior comprehending patients' own mental and physical condition without saying and keeping a reasonable distance. It is essential for Japanese patients with their own cultural background to be provided caring with reliable environment for medical treatment based on nurses' behavior reading patients' condition.

研究分野：基礎看護学

キーワード：ケアリング 文化 看護教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ケアリングとは、対象者との相互関係を示す看護における重要概念の一つである。よって、その教育は臨床に限らず看護基礎教育から取り組む必要がある。看護者のケアリング能力の向上を目的とした場合、対象となるケアリング能力を適切に評価する方法が必要である。しかし国内には、看護者個人が有するケアリング能力の評価ツールは見当たらない。これまでに私たちが米国で開発された Caring Ability Inventory (Nkongho, 1990) (以下、CAI とする) 日本語版作成に取り組んできた過程で、ケアリング能力の構成要素が原版とは異なることが明らかとなった。米国と日本では、人間関係を築くためのアプローチ方法が異なり、自己の内面を表現する方法や人との距離の取り方などに違いがある。それらがケアリング能力の構成要素の違いに影響していると推察された。ケアを提供する者は、ケア対象者が持つ文化的背景を理解するとケアリング能力を発揮しやすい。それには日本の文化的背景を反映させた日本的ケアリング能力を明らかにし、その評価基準となる尺度を開発する必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、我が国の文化的背景に基づいたケアリング能力の構成要素を明らかにし、今後、看護学生が有するその能力を測定する尺度を開発する基礎的資料とする。

3. 研究の方法

我が国の文化的背景に基づいたケアリング能力の構成要素を明らかにするために、ケアリングに影響する文化およびケアリングの概念そのものに関する文献検討、我が国の看護基礎教育課程で使用されるテキストにおけるケアリングに関する記載内容の分析、我が国の患者が捉えるケアリングについてのインタビューを実施した。

(1) 文献検討

PubMed と CINAHL を用い、「caring」「cultural diversity」「nursing」をキーワードとして文献検索を行い、特定の文化的背景を有する患者への看護について記述された文献から、ケアリングに影響する文化的多様性について整理した。同様に PubMed と CINAHL を用い「caring」「concept analysis」をキーワードとして文献検索を行い、ケアリングという概念について比較検討した。

(2) 看護基礎教育課程で使用されるテキストの分析

文献検討の結果を踏まえ、ケアリングに関する行動や態度に着目した。看護における行動、態度に関する教授の中で、様々な現象を包含している看護倫理学に焦点を当てることとした。対象とするテキストは、看護者に役立つ情報提供や看護書の販売について考える看護会の会員出版社から発行されているテキストを参考にし、基礎看護学を専門に教育している研究者間で協議のうえ、7社の出版社から発行されている看護基礎教育課程で使用する看護倫理、看護学概論のテキストとした。テキストの記述の中で、看護理論家の引用部分を除いた「ケアリング」という用語を使った説明箇所を抽出した。その後、Text Mining Studio Ver.6.0 を用い、原文を参照して単語頻度解析、係り受け頻度解析、ことばネットワーク分析を行った。

(3) 患者が捉えるケアリングに関するインタビュー

文献検討の結果からインタビューガイドを作成し、過去2年以内に1週間以上の入院経験のある患者を対象に半構成的面接を行った。本研究代表者の所属機関および協力病院の倫理審査委員会から承認を得て実施した。対象者には、研究趣旨、目的、方法、倫理的配慮等を説明し、自由意思の尊重、個人情報保護、通院中の施設から受ける治療には一切影響しないことを保障したうえで進めた。インタビュー内容は、入院中に看護師から受けたケアそのものや、看護師の行動や態度、かけられた言葉などで癒された、安心できた、希望をもてたといった肯定的な感情につながったことなどであった。インタビュー内容は、対象者の同意のうえ録音し、逐語録を作成した。その後、質的帰納的に分析した。

4. 研究成果

(1) これまで取り組んできた CAI 日本語版の信頼性・妥当性検証

CAI 原版は「知ること」「勇気」「忍耐」の3要素からなる全37項目の尺度である。開発者に使用許諾を得て日本語への翻訳、逆翻訳を行い、看護学生90名を対象にパイロットスタディを行い表面妥当性の確保の過程を経て、中国・九州地方の9病院の看護師635名を対象に無記名自記式質問紙調査を実施した。回収した411部(回収率64.7%)から尺度の全質問項目に回答している384部を対象として因子分析を行った(有効回答率93.4%)。スクリープロットの結果から原版と同じ3因子として分析した結果、原版の下位尺度が混在する構造になっていた。Cronbach 係数は、尺度全体では.801、下位尺度別である「知ること」.789、「勇気」.716、「忍耐」.182と信頼性の確保には不十分であった。CAIは看護に関連した行動を問うものではなく、その人自身がもつ普段の行動傾向や心的傾向を問うものである。原版が開発された米国と日本では文化に基づく思考の違いが影響していると考えられるため、それを踏まえて質問項目を再検討する必要があると考えられた。

(2) 文献検討

特定の文化的背景に関する文献は、米国、英国、スウェーデン、ノルウェー、サウジアラビ

アで調査された文献だった。その中で、ケアリングに影響する文化に関しては、すべて移民である患者に対する看護に基づいて述べられていた。患者および家族の文化的多様性には、コミュニケーション、患者および家族の価値観、宗教、患者および家族が感じる民族主義があった。また、看護師の限られた文化的知識がケアリングに影響していた。

ケアリングに関する概念分析がなされた文献内容について比較検討した結果、ケアリングという概念、ケアリングを属性に含む概念、ケアリングという文脈における概念、ケアリングの関連概念がみられた。ケアリングとは、看護師と患者との関係性やケアの属性として存在しており、また、尊厳の保持、感情移入、患者の自律性、感情労働、思いやりといった看護師の行動や態度といった側面がケアリングという文脈の中で具現化されていた。

(3) 看護基礎教育課程で使用されるテキストにおけるケアリングに関する記載内容

7社のテキストのうち、ケアリングという用語を用いた内容の記載がなかった3社を除いた4社のテキストの記載内容からテキストデータを抽出した。単語頻度解析の結果、上位5単語は「ケア」「ケアリング」「患者」「人」「看護師」だった。下位の中には、「関係性」「関心」「気づかい」といった単語が認められた。係り受け頻度解析の上位は、「尊厳 - 守る」「ケア - 提供」「ニーズ - 満たす」「患者 - 尊重」だった。ことばネットワークでは、「ケアリング」「ケア」「患者」という高頻出単語に加えて、「尊厳」「配慮」「尊重」「関係性」「意味」といった単語との共起関係が表れていた。看護倫理という教授内容の特性上、基本的人権の尊重に基づいた記載内容が多かった。また、看護倫理が包含する現象が幅広いため、ケアリングに関する行動や態度を具現化した記載は少ないと考えられた。看護専門職者として必要なケアリング能力の育成には、ケアリングを具現化する行動や態度の言語化、可視化が必要であることが示唆された。

(4) 我が国の文化的背景を有する患者が捉える看護師のケアリング

過去2年以内に1週間以上の入院経験のある患者を対象に、3施設に通院中の19名にインタビューを行った。対象者の内訳は、男性7名、女性12名だった。対象者の年齢は20代1名、40代5名、50代3名、60代1名、70代以上9名だった。過去2年以内に入院に至った理由は、がん、肺炎、心疾患、ヘルニアなどであり、これまでの入院経験は1~18回だった。

まず対象者の語りから、安心できた、癒された、希望をもてたといったケアリングにつながる看護師の関わりについて述べている部分をコードとして抽出した。その後、意味内容の共通性を検討しながらサブカテゴリ、カテゴリーを形成した結果、「気にかけてくれる」、「親近感を生む会話」、「柔らかい態度」、「察してくれる」、「距離感を図る」といったカテゴリーを抽出できた。

対象者は、術後に痛みなどを伴い不自由な状態の中で、看護師が室温のことなどこまめに確認してくれることや廊下歩行中に対象者自身が回復を自覚できるような声をかけてくれることに「気にかけてくれる」と安心感を覚えていた。また、検温時に子どもの話や前日の野球中継の話など入院生活とは関係ないと思われるような「親近感を生む会話」をされることによって、入院生活における入浴の時間などの小さな疑問に関して看護師に声をかけやすくなると感じていた。そういった時の看護師の視線を合わせる、笑顔を見せるといった「柔らかい態度」は、看護師が優しいという認識につながり、声のかけやすさに加えて一層の安心につながっていた。病気に捉われてばかりいたくないという思いから「親近感を生む会話」に見られるようなフレンドリーな関わりを求める一方で、家族のことなどプライバシーに深く関わるような内容には、看護師が「距離感を図る」ことで嫌な思いを感じることなく過ごすことができたと捉えていた。また、診断を宣告された時や、治療による影響で体調が優れない時など、その時々患者の状態に応じた看護師の関わりは、「察してくれる」行動として捉えられ、安心感につながっていた。

我が国の文化背景を有する患者が捉える看護師のケアリングは、入院生活における些細な疑問を尋ねることに躊躇しなくてもよいという安心感や、疾患や治療に伴う大きな不安を前向きな気持ちに変化させること、疾患に対するネガティブな感情や入院という非日常を忘れ、場合によっては楽しく感じるということに影響していた。これらは、看護師のケアリング能力として、患者が安心できる療養環境を提供するために必要な行動をすることや、患者の心身の状態を把握、判断し、患者から求められる前に声をかけ、その状態に応じた関わりをすることが欠かせないことが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 3 件)

Satoko Ono, Misae Ito, Emi Kajiwara, Hidechika Iino, Tsuyoshi Kataoka, Comparison of concepts related to caring: A literature review, TNMC & WANS International Nursing Research Conference, 2017

小野聡子, 梶原江美, 伊東美佐江, 飯野英親, 片岡健, 看護倫理テキストにおけるケアリングに関する記載内容のテキストマイニング分析, 第37回日本看護科学学会学術集会, 2017

小野聡子, 飯野英親, 梶原江美, 本田輝子, 末光順子, 小田日出子, 岩本テルヨ, Caring Ability Inventory 日本語版の信頼性・妥当性の検証, 日本看護学教育学会第25回学術集会, 2015

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：梶原 江美

ローマ字氏名：Emi Kajiwara

所属研究機関名：福岡看護大学

部局名：看護学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：00389488

研究分担者氏名：飯野 英親

ローマ字氏名：Hidechika Iino

所属研究機関名：福岡看護大学

部局名：看護学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：20284276

研究分担者氏名：伊東 美佐江

ローマ字氏名：Misae Ito

所属研究機関名：山口大学

部局名：大学院医学系研究科

職名：教授

研究者番号(8桁)：00335754

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。